

平成27年度 病害虫防除技術情報 第3号

平成27年4月23日
大分県農林水産研究指導センター
農業研究部

ナス科作物および花き類のCSNV防除対策の徹底について

平成27年3月に県内の夏秋ピーマン産地において、苗の段階で葉に退緑斑点、えそ輪紋、退緑輪紋、黄化、萎縮、えそ斑点症状が発生した。

このため、ピーマン症状株を送付し、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構・中央農業総合研究センターにおいて電子顕微鏡観察、遺伝子診断および塩基配列の解析を依頼した結果、キク茎えそウイルス *Chrysanthemum stem necrosis virus* (CSNV) が検出された。病原性等の詳細については現在調査中である。

本県では既にトルコギキョウで発生が確認されているが、今後はトルコギキョウおよびピーマンだけではなく他の作物で本ウイルスによる病害が発生する可能性があるため、速やかに防除を徹底する必要がある。

1 病徴及び伝染方法

(1) 病徴等

ピーマンでは葉に退緑、えそ輪紋症状等（写真1）、トルコギキョウでは葉にえそ輪紋症状等（写真2）が生じる。

(2) 伝染方法

本ウイルスはミカンキイロアザミウマ（写真3）によって媒介される。1齢幼虫が罹病植物を吸汁することで本ウイルスを獲得し、永続的に伝搬するが、経卵伝染はしない。種子伝染および土壌伝染は確認されていない。

(3) 本ウイルスの宿主範囲

本ウイルスによる病害は、本県を含めてこれまでに28都県で報告されている。宿主範囲はトルコギキョウ、ピーマンの他に、国内ではトマト、キク、アスターで発生が確認されている。海外ではタバコに感染することが報告されているが、これまでに国内において発生は確認されていない。ピーマンでの感染確認は、茨城県、栃木県に次いで全国で3例目となる。

2 防除上注意すべき事項

- (1) 発病株は抜き取り、ほ場外に持ち出して焼却または埋没処理する。ほ場周辺に放置すると二次伝染源となるので速やかに処理する。
- (2) 施設では開口部に防虫ネットを被覆し、ミカンキイロアザミウマの侵入を防ぐ。防虫ネットは0.8mm目合い以下が望ましい。
- (3) 施設内および周辺の雑草はミカンキイロアザミウマの増殖源となるため、除草を徹底する。また施設内に観賞用花き類等を植えない。
- (4) 青色または黄色の粘着トラップを設置して、ミカンキイロアザミウマの早期発見に努める。
- (5) ミカンキイロアザミウマの薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避ける。使用薬剤は大分県農林水産研究指導センター農業研究部病害虫チームホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」を参照し、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守する。特に同一成分を含む薬剤を連用しないようローテーション散布を心掛ける。
(ホームページアドレス <http://www.jppn.ne.jp/oita>)
- (6) 混合剤の場合、異なる商品名で同一の薬剤成分が含まれる場合があるため、「成分総使用回数」を十分確認した上で使用する。
- (7) 栽培終了後は、施設を密閉して蒸し込み、保毒虫を死滅させる。また残さ等は速やかに除去する。
- (8) 疑わしい症状や、本病害虫技術情報に関するお問い合わせは下記へ

連絡先：大分県農林水産研究指導センター農業研究部病害虫チーム
後藤・岡崎
(電話) 0974-28-2078



写真1. ピーマンの症状:退緑斑点症状(左)、えそ輪紋症状(右)



写真2. トルコギキョウでのえそ輪紋症状



写真3. CSNV媒介虫のミカンキイロアザミウマ成虫
(体長1.0~1.5mm)